

ジエームズ・ジョイス『ユリシーズ』

— 小説はものになれるか？

付録「自称『ワハハ教授』へのインタビュー」

阿部公彦

英語圏はランキング好きな人が多い。「英文学で一番すごい小説はどれか？」というようなアンケートも頻繁に実施される。その是非はともかく、こういうアンケートで「有識者」が必ずといていいほどあげる二大作品が、ジエームズ・ジョイスの『ユリシーズ』（一九二二）とジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』（一八七二）である。実は『ユリシーズ』の魅力について考えるにも、その先輩格で、目の上のたんこぶでもある『ミドルマーチ』のことから始めるのが助けになる。

『ミドルマーチ』の最大の特徴は長さである。この作品は、タイトル名にもなっている中部イングランドの架空の町で展

開する老若男女の人間模様を描くのだが、とにかくすべてが長い。総ページ数だけの話ではない。まずセンテンスが長い。パラグラフも長い。情景描写も背景説明も長く、人物の紹介も長い。場面の描き方も緻密で細かく、心理描写も長々と微細な襞に分け入っていく。あまりに長いので、語り手が途中で飽きて、「あーあ。またまたこんな話になっちゃった」とゲップみたいな一言を挿入したりもする。すると読者としても「ひゃあ。長丁場やなあ」という気分が増す。

この長さは「退屈」と紙一重である。しかし、辛抱強く言葉と心理と時間をじわじわ繰り上げていくこの作品には、小説というジャンルの究極の魅力がたっぷりつまっている。

「そうかあ。こんなに時間がたったかあ」と心の底から思わせる時間体験がそこには生まれるのである。単なる観念の詰め込みとは違う。妄想と怨念と希望の混じり合った情念が滔々と流れ、向こうの方はぼんやりと霞み、こちらに近づくとつれてくつきりと鮮明に、そしてふと見あげると、すぐそこに鋭い峰がそびえ立つ。悠々たる景色である（別に出登りの小説ではありません。念のため）。

近代小説の一つの頂点がここにはある。「ミドルマーチ」を読むと、まるで時間体験が深いものへ、真実へと私たちを導く通路であるかのように思えてくる。私たちはこうして長さ・深さ・真実だと感じる（心の構造）を身につけるのである。

では「ユリシーズ」はどうか。この小説も総ページ数では「ミドルマーチ」に負けてはいない。だが、「長さ」との付き合い方がまったく異なる。二〇世紀初頭のジョイスにとって、「長さ」はもはや一九世紀的深遠さなどたたえていない。「長さ」は退屈と日常性の具現なのである。ジョイスをはじめとしたモダニズムの作家たちにとって、もともと古くさく嘘くさく思えたのが、滔々と時間の流れる一九世紀的長編の世界だったのである。小説というジャンルは大きな曲がり角を迎えていた。

タイトルにあるように「ユリシーズ」はホメーロスの「オデュッセイア」（主人公オデュッセウスのラテン名Ulixesの英語形が「ユリシーズ」を下敷きにした作品である。「オデュッセイア」はホメーロスによる古代ギリシャの長大な叙事詩で、同じホメーロスによる「イリアス」の続編。

行とがパラレルになる。「じつと我慢しながら彼は静かに一段目を読み、そして、出しながらかも抑えながら、二段目を読みはじめた。半分まで来て、すっかり抑えることをやめて静かに内臓が開いてゆくに任せながら読み、じつと辛抱よく読みつづけるうちに、昨日の軽い便秘はすっかり取返しがついた。あまり大きいとまた痔がひどくなるんだが。いやいや、ちょうどいいところだ。そう。あつ！（一巻 八五）ブルームは「自分じしんの立ちのぼる臭気のなかにじつと坐ったまま読み」つづけるが、「ユリシーズ」の読者もまたこの臭気にどっぷりとつかう。脱糞だけではない。ブルームは気の散りやすい、行き当たりばつたりの妄想家である。頻りに彼の心を訪れるのは性的妄想。第二三章では海辺の岩に腰かけてしゃべる少女たちの様子が描かれるが、ブルームがそれをのぞき見ている。そのうちに彼の頭には、妻モリーをはじめさまざまな女性の性的嗜好をめぐる夢想が去来し、ついに興奮のあまりマスターベーションで性欲を発散せざるを得なくなる。「ミスタ・ブルームは丹念な手つきで濡れたシャツをととのえた。おお神様、あの小さなびっこの悪魔め。なんだか冷たくてじとじとしてきた。あと味はよくない。しかしとにかく出してしまわなきゃ仕方がないんだから」（二巻 三五）。

「ユリシーズ」はこの妄想家であり迷走家であるブルームを主人公に据えたおかげでこそ成立した。徹底した即物性とともに世界と接する彼にとって、すべての現実の根にあるのはこうした生理的事実であり、彼のリアリティの土台は糞便と悪臭と性欲によって作られる。もちろん、その「リアリテ

トロイア戦争で勝利した英雄オデュッセウスが、故郷に戻ろうとして二〇年間も漂泊するその様子を描く。加えて、故郷で夫を待ち続けるペネロピーや、父を捜し求めるテレーマコスなどの物語もからむ。何しろ叙事詩だから、壮大なスケールで移動と時間の経過がたっぷり語られる。

一方、ジョイス版の「ユリシーズ」の舞台はアイルランドのダブリン。いちおう首都だが、ロンドンやパリにくらべてはるかに小ぶりなこの街を、広告代理店に勤めるハンガリー系ユダヤ人のレオポルド・ブルームが迷う二四時間が小説中に描かれる。「オデュッセイア」と同じように、息子の存在となるステイヴン・ディーダラスや、不貞の疑いのある妻モリーがフォーカスされる章もあるが、別に大冒険が繰り広げられるわけではない。典型的なのが第四章の冒頭部だ。「ミスタ・レオポルド・ブルームは好んで獣や鳥の内臓を食べた。好物はこつてりしたもつのスープ、胡桃の味のする砂囊、詰めものをして焼いた心臓、生パン粉をまぶした肝臓のカツレツ、鱈子のソテー。なかでも大好物は羊の腎臓のグリルで、ほのかな尿の匂いが彼の味覚をそそった」（一巻 六八）。

この一節からもわかるように、「ユリシーズ」は、ホメーロスの叙事詩に描かれた雄大で冒険性に満ちた時の流れを、日常的で冒険性のかけらもない、むしろ凡庸で低俗で卑近な世界に引き摺りおろしてやる。この第四章の終わりでは、冒頭部と呼応するかのようブルームの「うんこ」の現場が長々と描かれる。ブルームは用を足すときに読書するのが癖。そんな彼の心の中で、新聞に掲載された懸賞小説と脱糞の進

イ」はステイヴン・ディーダラスの観念性や、モリーの横溢する感覚性と並置されればこそ映えるのだが、作品に通底する、物から物や言葉から言葉をほしごするよう連鎖する意識の運動は、二〇世紀の始めに書かれた多くの先鋭な小説や詩のロジックとも重なる。ブルームの視線には新しい時代のリアリズムの、純度の高いあらわれを見ることができ。意味と精神の君臨を疑い、ものと形に注目しようとした二〇世紀初頭の思想的傾きがそこにはじみ出していたのである。「ユリシーズ」が壮大な文体的実験場となったのもこうした背景と関係している。「ユリシーズ」では、ステイヴンやブルームといった中心人物の彷徨が章ごとに異なる文体で語られる。とくに有名なのは第四章で、ブルームが知人の女性を病院に見舞い、そこでステイヴンと遭遇する経過が、古英語の詩形からマロリー、欽定訳聖書、パニヤン、デフォード、スターン、ウォルポール、ディケンズ、カーライルといった、英文学史に燦然と輝く作家作品の模写を通して描き出される。キリスト教の教理問答のスタイルをパロディした第一七章も実に小気味良いひねりがきいて、ジョイス自身のお気に入りだったと言われるし、そのほかにも、さまざまな仕掛けやアリュージョン（言及）を半ば謎かけの挑戦的に作家は埋め込む。

その到達点として、必ず引用されるのが最後の第一八章のモリーの独白である。「そうよだつてあさのしよくじをたごをふたつつけてベッドのなかでたべたいなんてかれがいたことはステイブームズホテルにいたころからずっといっぴりだつてなかつたことなんだものあのころかればいつもびよ

うにんみたいなこえをだしてびようきでひきこもってるみたいなふりをしてていしゆかんばんくであのしわくちやのミセスリオーダーのおきにいりになるうとして」とはじまる独白は、句読点を一切省き、節と節とが水平的に連鎖する書き方を採用することで、モリーの性的妄想や過去の想起などの「生理的眞実」を未整理のまま鮮烈に伝えてくる。「意識の流れ」（心理学者ワイリアム・ジェイムズの言葉）の代表例と見なされてきたこの独白は、意識の濾過によって秩序づけられたり、洗浄されたりする前の「ナマの声」を表現するが、ここには文体模写と同じく、どこまで言葉を身体としてとらえられるかの試みがあると言えるだろう。and yes I said yes I will Yes、という肯定の連呼で終わるこの独白に、『ユリシーズ』という作品の究極の「力」を見る人も多い。

付録 自称「ワハハ教授」へのインタビュ

——ワハハ先生。いかがですか、『ユリシーズ』？

——ワハハ。「ユリシーズ」を読むときは、理屈こねてばかりじゃ、ダメだね。こりや、とにかくふざけた悪のり小説よ。潜み笑いがずっと聞こえてくるのよ。第一章なんかはふつうの小説として読めそうなものだけど、だんだんおかしいことになって、もう第三章のあたりからあちこちんぶんかんぶん。難しいこと言ってる批評家連中だって、わかっちゃいないところが多いわな。ワハハ。

——ちんぶんかんぶんじゃ、すごい小説かどうかもわからないですわね。

——ワハハ。おっしゃるとおり。しかしな、読んでるうちに少しづつわからなくなるわけよ。最初はわかっているのか、わかってないのかさえわからんのよ。しかも、「こりや、もうあかん。ダメや。お手上げや」というとこまで行っても、何だか半分くらいはわかっている気もする。もっと不思議なのは、そうやって煙に巻かれるのがまた楽しいんだな、これが。ワハハ。

——楽しい？

——ワハハ。そうよ。不思議とな。それはな、模写でも何でも書きつぷりが見事だから、そのノリとカリズムに圧倒されるってこともあるんだが、何だか文章の向こう側から「ストトコドンドンドン」て変なチンドン屋みたいなBGMが流れてくる気もするんよな。それだけでもう参ってしまう。ワハハ。

——ということはその「ストトコドンドンドン」を聞き取らないといけないと？

——ワハハ。まあ、そうなんだが、あんた、そんな眉間に皺よせて真面目な顔したらあかんよ。「ストトコドンドンドン」は小説と一緒にあって踊ってみらんと、聞こえやせんよ。ワハハのハ。

——はあ……、そうですか。ともかく、どうもありがとうございます。ありがとうございました！（眉間をいじりつつ）

*引用は丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳『世界文学全集 Ⅱ-13 ジョイス』『Ⅱ-14 ジョイスⅡ』（河出書房新社 一九六四）に基づく。